

大学教育における多文化共生マインド醸成の可能性を探って

—「やさしい日本語」の導入による一試み—

日本語コミュニケーション学科 大塚 みさ

抄録

人口減少が進む日本において、外国人材の受け入れは不可欠であり、その実現には多文化共生の実現が必須である。その担い手の主役となることが期待される大学生に対して、どのような教育的アプローチが可能だろうか。本稿では、筆者が「やさしい日本語」の導入によって行った2023年度の講義およびゼミ形式の演習における教育実践例を報告し、その可能性を探究する。

In the context of Japan, where population decline is progressing, the acceptance of foreign talent is imperative, and the realization of intercultural cohesion is essential for this purpose. To address the key players expected to contribute to this, namely university students, what educational approaches may be viable? This paper reports on the educational practices implemented during the 2023 academic year through lectures and seminar-style exercises conducted by the author, utilizing "Yasashii Nihongo", and explores the potential of such approaches.

キーワード

多文化共生 (intercultural cohesion)、やさしい日本語 (*Yasashii Nihongo*)、市民性形成 (citizenship development)、大学生 (university students)

1. はじめに

人口減少が進む日本では労働力が2040年に1千万人以上不足し、特に人口減少に歯止めがかからない地方においては外国人材が必須だと指摘される。総務省は2006年に「地域における多文化共生推進プラン」を策定し、全国の自治体で多文化共生への取り組みが進められている。しかしながら、現代日本においてははまだ多文化共生社会の形成途上であると言えるだろう。

種々の課題のうち、しばしば「ことばの壁」「日本語の壁」として指摘される言語面について

は、日本語母語話者の意識改革が不可欠であることは言うまでもないが、その実現は容易ではない。これを踏まえて、筆者は将来の日本社会を背負うことが期待される大学生に対して、授業を通した多文化共生の「マインド醸成」を試みてきた。

本稿では、筆者が「やさしい日本語」を用いて行った2023年度の複数の講義およびゼミ形式の演習における教育実践例を報告した上で、その可能性を探究する。

2. 多文化共生と「やさしい日本語」

山脇(2020)によれば、1990年代から用いられてきた「多文化共生」という用語には定訳がない。同コラムでは、インターネット上の機械翻訳でヒットする"multicultural coexistence"や"multicultural symbiosis"はほぼ日本国内で用いられていて英語話者には通じにくい点、総務省が2006年に策定した「地域における多文化共生推進プラン」には外国語版が作成されておらず、暫定訳では「共生」の訳語に"coexistence"が使用されている点、そして翻訳の難しさは「多文化」「共生」それぞれにある点を指摘し、まだ結論に至っていないと断った上で「多文化共生社会」を"intercultural society"、「多文化共生」は"intercultural cohesion"を用いていると述べている。

一方、庵(2020: 64)は「多文化共生社会」について「持続可能」でなければならない点を強調し、"sustainable multicultural society"と訳すことを提案している。その実現の一例として「地域社会の共通言語」の唯一の候補である〈やさしい日本語〉に触れ、それを用いた「日本語の調整」を自発的な気持ちで行うことの重要性を説いている。

この「やさしい日本語」はしばしば新聞やインターネット等のメディアでも取り上げられているが、次章で報告するように大学生はおろか一般成人にも決して認知度が高いとは言えない。「やさしい日本語」が生まれた発端は、1995年の阪神・淡路大震災にさかのぼる。その復旧過程においては、情報発信が日本語と英語のみで行われたため、これら2言語と地域の特徴から一定量の情報提供があったと見られる中国語、朝鮮・韓国語を十分に理解できない外国人の多くが必要な情報を十分に入手できないという事態が生じた。そこで、専門家が簡単な日本語で提供する方策を研究したのが、専門用語としての「やさしい日本語」の始まりであったと言われている(庵2016: 36)。

しかしながら、「やさしい日本語」が求められるのは、こうした減災を目的とした場面に限らない。本稿では、以下この「平時における『やさしい日本語』」(庵2016、2020)ⁱを主たる対象として「やさしい日本語」と呼ぶ。

「やさしい日本語」に関する講演やワークショップは、様々な立場、観点から実施されており、一定期間継続して受講する講座も複数開講されている。後者について、筆者は2022年に「『入門・やさしい日本語』認定講師養成講座」ⁱⁱを受講する機会を得た。そこでの学びも本試みを目指す契機となっている。

3. 「やさしい日本語」の導入による試み

3.1 講義における導入事例

3.1.1 「ことばと生活」(対面形式・講義科目)

本科目の内容は社会言語学入門であり、前半ではことばの乱れ、若者ことば、いわゆる「バイト敬語」などを扱い、第9週～第11週の3回の授業で「ことばと多様性」に関する諸問題を扱っている。

第9週と第11週授業では、外部講師招聘制度を利用してゲストスピーカーを招いた授業を実施した。第9週はオーストラリアメルボルン大学の教員によるレクチャー(『『おネエ系』から「LGBTs」へ』)を行い、第10週は包括的言語(inclusive language)について主にジェンダーに関する問題を取り上げて、日本語および英語やフランス語における取り組みを示した。

第11週授業のトピックは「多文化共生社会のための『やさしい日本語』」であり、吉開章氏(一般社団法人やさしい日本語普及連絡会代表理事、やさしい日本語ツーリズム研究会代表)を講師に招いて「やさしいせかいーやさしい日本語で、やさしい世界を。」と題するレクチャーを行った。事前学修課題の一部には、「やさしい日本語」への認知度等を訪ねる質問項目を加えている。認知度については以下の図1の結果となった。

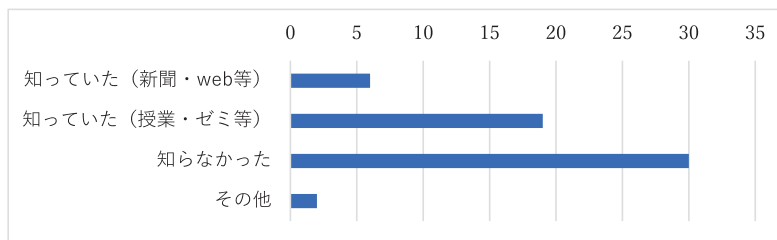


図1. 「やさしい日本語」認知度調査(複数回答可、n=52)

「知っていた(授業・ゼミ)」という回答者の大半は前年度「日本語学入門b」(前項)を受講していた学生や、筆者担当のゼミに所属して4月以降次章に報告する活動に参加している学生である。よって、入学前にはこの19名も「知らなかった」ということになる。

また、「やさしい日本語」とはどのような日本語だかと思うかという問いについて、「やさしい日本語」を「知らなかった」学生の回答は「易しい／誰にでも使える／簡単」と「優しい／他者を傷つけない」とがほぼ同数であった。

レクチャーの冒頭では、入管庁の在留外国人に対する基礎調査データをもとに在留外国人の日本語会話能力などが示され、「やさしい日本語」の定義、「はさみの法則」と紹介とその具体例、動画「やさしいせかい」の歌詞に沿ったレクチャーの順に進められた。マイクを回して学生の発言を促すことで、受講生が主体的に参加することができた。後半はグループ単位で「伝言ゲーム」

(吉開 2023: 201-202) における「3 文クッキング」をもとにしたワークショップ) に取り組み、さらに授業が活況を呈した。

授業後のアンケートでは、以下のような意見が寄せられたほか、アルバイト先での経験をもとに授業を振り返った意見が見られた。

- ・なるべく英語で受け答えしなくてはと思っていたが、日本語でよいのだと気づかされた。
- ・様々なことばや文化を受け入れもっと多言語の表現の違いや国を超えて理解していきたい。
- ・日本人が外国の方々に歩み寄り、分かりやすく伝える努力をすることが必要だと思い知らされた

講演経験豊富な講師による動画やグループワークを導入した展開のレクチャーにより、学生にとって大変刺激的な学びの機会となったことが察せられる。

さらに、この授業の翌週 (2023 年 7 月 3 日) 朝日新聞朝刊の特集「多民社会」において「やさしい日本語」が取り上げられたため、授業で記事を読み、以下についてアンケートアプリでの回答をクラスで共有した。

Q1. 現在および今後の日本社会において「やさしい日本語」が持つ可能性は何か

Q2. 現在および今後の自分自身が「やさしい日本語」を通してできることはどのようなことか

Q1 については、以下を始めとする多様な意見が出された。

- ・年齢の差や国籍を超えたわかりやすいことば遣いができるようになる。
- ・日本語を母国語としない人達が社会で幅広く活躍できる。
- ・外国人が日本にいて居心地のいい国だと思ってもらえる。
- ・日本語が難しいというイメージを薄めることができ、言語の壁も薄くさせる可能性がある。
- ・さらに日本の良さを知ってもらい、日本と外国の壁をなくしていける
- ・国際的なコミュニケーションの幅が広がり、多角的な考えを持つきっかけになる。

Q2 についても、意欲に満ちた意見が多数出された。

- ・多くの外国の方たちと親睦を深めながら日本の文化を拡げることができる。
- ・非日本語母語話者だけでなく、まだ言葉がおぼつかない子どもや声が聞き取りにくい高齢者／聴覚に障害のある人などに対して、相手の状況に寄り添った対話をすることができる。
- ・日本語は難しいから話す勇気がないという人を減らせる。
- ・話を聞く相手の気持ちを考えることが根本にあるため、相手を尊重する気持ちが生まれる。

レクチャーの記憶が新鮮なタイミングで記事を読むことができ、また受講生間の意見を共有できたことで、さらに意識を高める機会となった。

3.1.2 「日本語学入門 b」(オンデマンド形式・講義科目)

本科目では毎週配信する 3 本の講義動画それぞれにおいて、アンケートアプリによる小規模な課題を出している。その回答をクラス内でアプリを通して共有した上で、コメントシートを提出

する流れで授業を行う。以下に、2023年度の第12週～14週授業における取り組みを報告する。

まず、第12週授業のトピック「日本の言語政策」の一環として「やさしい日本語」を扱った。使用テキストでは、その直後のコラム（言語接触）でも防災場面で活用される「やさしい日本語」に触れ、「やさしい日本語」が「お互いの母語が異なる外国人どうしや、日本語が十分ではない外国人と日本人との間での共通語として用いることができるように工夫されている」ことを記している。

講義動画は、テキストの上記部分に触れた上で以下の順に展開した。

- (1) 吉開（2023：66）の「はさみの法則」を紹介
- (2) 同書 p.68 掲載の文例を、上記法則に沿って「やさしい日本語化」するワークの実施
- (3) アンケートアプリで「日本語は（そのままだと）どのような点でやさしくないか」について、具体例を添えて回答させる
- (4) 動画「やさしいせかい」を視聴させる
- (5) アンケートアプリで「やさしくない日本語をやさしい日本語にするためには、日本語母語話者がどのように意識を変える必要があるか」について回答させる
- (6) LMS でコメントシートを提出をさせる

翌第13週授業の1本目の動画において、上記（3）（5）（6）の回答を共有し、さらに周囲から「やさしくない日本語」を探して、自分なりに「やさしい日本語」に言い換える課題に取り組みさせた。（3）（5）の回答については敬語、漢字（複数の読み方）、文字体系の複雑さ、同音異義語の多さ、オノマトペの多さ、主語等の省略などが挙げられた。本学で留学生に接する機会は多くないが、学生たちはアルバイト先で同僚あるいは客として外国人に接する機会が多く、多様な意見が寄せられた。

第14週授業では半期間のまとめを行うとともに、能登半島地震におけるNHKニュースに触れたWeb記事を元に意見を書かせることで視聴意識を喚起した。

前項の報告事例とは対照的に、教室の空気や一体感の援用が難しいオンデマンド授業という環境であったが、YouTube 動画視聴やアンケートアプリを用いた意見交換等によって、関心を深める機会を用意することができたと考えられる。

3.2 「卒業研究」（対面形式・演習科目）

以下に、2023年度の「卒業研究 a」（前期）および「同 b」（後期）（以下「ゼミ」）における取り組みを報告する。年間を通して受講生は同一であるが、2023年度前期は韓国からの留学生2名（日本語上級レベル）がクラスに参加した。

3.2.1 「MORE JAPAN」記事書き換え

本ゼミでは2023年4月より集英社の雑誌『MORE』のWebサイト「MORE JAPAN」で全国

各地の魅力を伝える人気記事を、日本に住む外国の人などにも伝わりやすいように「やさしい日本語」に書き換えるプロジェクトに他の5大学とともに参加している。

2023年6月の初回公開に際して本ゼミでは4本の記事の書き換えを担当し、ゼミ生22名と韓国からの留学生2名計24名が4グループに分かれて取り組んだ。まず、第1週授業において「やさしい日本語」の解説・導入を行い、モデル記事を用いて練習した上で作業を開始した。卒業研究指導と並行しながら第2週、第3週にかけて企画ミーティングを重ね、書き換え案の提出、教員による点検、グループ間の相互評価を経て4月末に書き換え記事が完成した。

7月公開分は2本の記事の書き換えを担当した。この回から首都圏の他大学の留学生の協力を得て、書き換え記事に難解な語句・表現が残っていないかどうかを点検依頼することとした。

夏期休業中の9月および後期については、毎月1本の記事を有志学生が担当し、7月同様に別大学の留学生のチェックを経て完成させる形で活動を継続している。

3.2.2 取材と記事作成

前項の取り組みは、「東京のおすすめスポットめぐり」を中心とした記事の書き換え作業であり、それを通して本ゼミ所属学生の「やさしい日本語」への理解と関心が深まった。しかしながら、同時に第三者の経験を「やさしい日本語」に置き換えることの難しさを痛感したことも事実である。特に味覚や触覚等の五感に関する表現は、当人でなければ正確さを欠く場面も少なくない。そこで、次のステップとして各々が発信したい情報を選んで企画立案し、取材を通して自らが体験したことを「やさしい日本語」で発信する機会を設けることを計画した。その主な目的は、日本語を外から見る力、日本の良さを再発見する力、さらには情報発信力を磨く機会を磨くとともに、企画立案力、協働力を養成することにある。幸い、学内の助成金を得て前期中に着手できた。

具体的な取り組みは以下の通りである。まず、学生たちが3~4名のグループに分かれ、同世代の外国人と共有したい大学周辺のスポット（渋谷・表参道）を選んで企画立案し、取材を行った上でA4 1ページ分の記事にまとめる。取材は7月半ばに行い、その成果を10月の学園祭においてパネル形式で発表した。

パネルは、学生たちの取材による記事と編集後記、そして前項で報告したMORE JAPANの書き換えプロジェクトの取り組みや感想の2種類を作成した。前者についてはeBookを作成してゼミのウェブサイトに掲載した。以下に編集後記に掲載した学生の感想の一部を紹介する。

- ・MORE「やさしい日本語」記事のやさしい日本語に直すという活動は、実際に足を運んでいなかったり料理を口にしていなかったりしたため、日本語をやさしくするのは大変だった。しかし、7月の取材では実際に現地に赴いて記事を作成したため、書きやすかった。
- ・チームの人と取材先で必要な写真を撮り、記事作成を協力し合って作業できたため一体感を得られた。また、やさしい日本語にまとめる際にチーム同士で多くの意見交換をする機会があり、新しい発見や気づかなかったことがあったため、多くの学びを得ることができた。

- ・今回の活動を通して、自分自身も日本語について深く知られていない部分があることを実感した。難しい日本語が出てきた際、どんなふうに表現すれば外国人の方がわかりやすいか、というのを考えて文章を書いたことがなかったので、表現したいけどできないもどかしさを、母国語で感じることはあると思っておらず新鮮な体験だった。

学園祭では、来場者にパネルを用いて活動内容を紹介するとともに、取材記事については「最も行きたい店」に付箋を貼ってもらい、さらに web アンケートへの回答を依頼した。アンケートについては 84 名から回答を得ることができた。質問項目のうち、「やさしい日本語」に関する部分と回答を以下に紹介する。

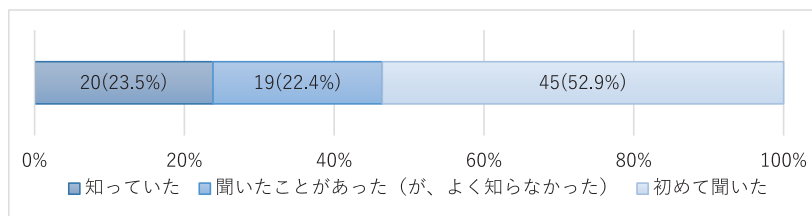


図 2. 「やさしい日本語」の認知度 (n=84)

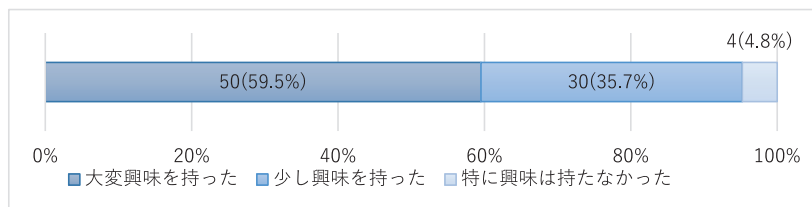


図 3. 「やさしい日本語」への興味 (n=84)

上記の結果から、「やさしい日本語」についての認知度を高め、興味を深めてもらうという点において本企画は概ね成功したと言えるだろうⁱⁱⁱ。感想欄には多数の肯定的な意見が寄せられたほか、具体的な提案も得ることができた。これらを踏まえ、次年度は「やさしい日本語」の書き換え体験などを含むワークショップの開催なども企画して、さらに有効な学びにつなげる可能性を探っていきたい。

3.2.3 やさしい日本語で渋谷のスポット案内

MORE JAPAN の記事書き換え活動 (3.2.1) においては、書き換え記事とそれに対するコメントの交換という間接的交流を通して本ゼミ所属学生と他大学の留学生との連携を行った。これを一歩進めて学生同士が対面で直接交流する機会を設け、その効果を確認することとした。

具体的な活動内容は下記の通りである。はじめに本ゼミで作成した eBook (3.2.2) を留学生が

閲覧し、最も魅力を感じた飲食店を選ぶ。そして最多票を得た店をゼミ所属学生が「やさしい日本語」を用いて案内する。これにより、これまでの「やさしい日本語」を「書く」活動に「話す」が加わることになる。当日はゼミ所属学生5名、留学生5名が2つのテーブルに分かれて着席し、終始活気のある会話が展開された。店を出た後は本学キャンパスに移動し、学内スポットを学生が案内した。

活動後、それぞれにアンケートを実施した。ゼミ所属学生に対して、「やさしい日本語」を話すことの難易度を文字で書く記事と比較して答えさせたところ、大半が「話す方が易しい」という回答した。その理由としては、相手の反応を見ながら表現を変えたり、ジェスチャーを加えたりできるという、話しことばに一般的な特徴が挙げられた。少数派の「話す方が難しい」という理由は、考えると同時に話すことを困難に感じたというものであった。一方、留学生からは「やさしい日本語」で会話してもらえて分かりやすかったという評価が寄せられた。

最後に、ゼミ所属学生の自由回答を1件だけ紹介したい。

・留学生から、日本語が話せないと思われて英語で話しかけられるのが少し寂しいという話を聞き、やさしい日本語の必要性をとて感じた一日になった。

今回の取り組みは単発かつ短時間によるもので、参加者もゼミ所属学生の一部に過ぎなかった。しかし日本語非母語話者のこのような「生の声」を聞いたことは、これまでの活動以上に貴重な経験になったと思われる。

4. その他の試み―「第三者返答」

最後に、「やさしい日本語」とは少し別の視点から多文化共生について考えるべく「第三者返答」を扱った事例を報告する。提唱者オストハイダ (2005: 39) は、これを下記のように説明している。

話し手が、話しかけてきた話し相手が有する外見的特徴などの言語外的条件に基づき、(話し相手との意思疎通に問題がないにも拘らず) その話し相手を無視し、話し相手と一緒にいる第三者に返答すること

この概念について考えさせる試みを、対面形式の講義科目「コミュニケーションと心理」の第13週後半と第14週授業の前半で実施した。この授業ではTBL(チーム基盤型学習)^{iv}を導入し、毎授業において4~5名の「チーム」でのディスカッションを多く取り入れて実施している。

第13週では、あえて教員による解説を行わず、気づきを待つ態勢に徹した。まず、「第三者返答」場面を切り出した2本の短い動画^vの視聴とそれぞれについてのディスカッション、チームリーダーによるアンケートアプリへの投稿と共有を行わせた。そして、動画全体を視聴させて各自に気づきをアンケートアプリで回答させた。その後チーム単位で2種のロールプレイ^{vi}を行い、各自に事後学修課題として以下の3点について翌週までに回答するよう指示した。

Q1 今回取り上げた事象の問題点は何か

Q2 Q1 の名称は何か（適切な名称を考えて提案する）

Q3 今回の学びについて、日常生活における類似の体験があればそれも含めて）「コミュニケーションの壁」という観点から 150 字程度で意見をまとめる

「第三者返答」場面を切り出した動画視聴後の投稿内容には、即座に問題点を理解したチームも半数あった一方、論点がずれたり、意味が分からないと回答したりするチームも見られた。しかし、事後学修課題では、ほぼ全員が正しい理解に到達していた。中には、ロールプレイを通して当事者の立場を体験することで気付けたという報告もあった。紙幅の関係でその他の報告は割愛するが、この行為を意図的か否かにかかわらず行った経験（「知らず知らずのうちに」「コミュニケーションを円滑にするために」）や、受けた経験（親と一緒に買い物場面や高校時代の三者面談場面）について多様な意見を収集することができた。

5. おわりに

多文化共生社会の実現に向けた道は決して平坦ではない。しかし、今後の日本を担う大学生をはじめとする若い世代には、必ず備えておいてほしい視点である。現時点では必ずしも全大学生に多文化共生に対する意識が備わっているわけではない。しかし、本稿の 3、4 章で報告した実践例は、そういった層に対しても、効果の差こそあれ教育的アプローチが可能であることを示せたのではないだろうか。

今回の試みは主として「やさしい日本語」を用いて行い、導入授業の授業形態（対面／非対面、講義／演習）にかかわらず、一定の成果を得られることが確認できた。とはいえ、やはりゼミのように長期間に渡って継続的な取り組みを行うこと、学生が主体となって「やさしい日本語」を用いて発信する機会を用意することの貴重さ、重要性は言うまでもない。今回の取り組みは手探りの部分が多かったが、これをパイロットスタディととらえ、次年度以降の教育実践に生かしていきたい。月並みな表現ではあるが、学生たちが「自分事」として捉えられるかどうかが鍵となる。次年度は特にこの観点からの取り組みを進めていく所存である。

ところで、本試みの先には、ことばに関するシティズンシップ教育あるいは市民性形成（細川 2016 ほか）との関連性の探究がある。これについても今後の課題としたい。

-
- i 庵（2000:5、他）は、減災目的に限らず平時における情報提供の手段として簡略化された日本語を指して〈やさしい日本語〉と表記する。
 - ii にはんごぶらっと主催の養成講座。企画・運営は一般社団法人やさしい日本語普及連絡会代表理事、やさしい日本語ツーリズム研究会代表の吉開章氏であり、吉開（2023）に準拠したワークショップを運営することができる。
 - iii 本企画は学園祭において学長賞（研究部門）に選ばれ、表彰された。

- iv Team Based Learning の略。知識を応用する能動的な学習に学生を引き込むことを重視し、グループで協働して互いに教え合う能力を鍛える少人数チーム学習の教育法（尾原 2013）。PBL（Problem Based Learning）に比べて大規模クラスで一斉に授業を行える利点があり、2003 年ごろから米国を中心に医学教育等で用いられている。具体的な説明は、高知大学総合教育センター・大学教育創造部門作成 Tips 等に詳しい。
- v 明治大学国際日本学部横田雅弘ゼミナールとの協力のもとに「やさしい日本語ツーリズム研究会」が企画・制作した動画。第三者返答のシーンのみを抜き出した 2 本の短い動画や、音声ガイド版も用意されている。
- vi kokohana やさしい日本語でつながる八王子の会主催のワークショップで導入されたロールプレイを、主催者の許諾を得て実施した。ロールプレイのシナリオは若干の修正を加えてそのまま用いている。

参考文献：

- 庵功雄（2016）『やさしい日本語—多文化共生社会へ』（岩波新書）岩波書店
- 庵功雄・イヨンスク・森篤嗣（編）（2013）『『やさしい日本語』は何を目指すか——多文化共生社会を実現するために』ココ出版
- 庵功雄・岩田 一成・佐藤琢三・柳田直美（編）（2019）『〈やさしい日本語〉と多文化共生』ココ出版
- 庵功雄（編著）（2020）『『やさしい日本語』表現事典』丸善出版
- 稲垣みどり・細川英雄・金泰明・杉本篤史（2022）『共生社会のためのことばの教育——自由・幸福・対話・市民性』明石書店。
- 牝川波都季（編著）（2019）『日本語教育はどこへ向かうのか 一移民時代の政策を動かすために』くろしお出版
- 高知大学総合教育センター・大学教育創造部門作成 Tips 「TBL（チーム基盤型学修）で授業改善」
https://www.kochi-u.ac.jp/_files/00153058/06archive_teachertips_05.pdf
- バイラム, M（2015）『相互文化的能力を育む外国語教育—グローバル時代の市民性形成をめざして』（細川英雄監修、山田悦子・古村由美子訳）大修館書店（*From Foreign Language Education to Education for Intercultural Citizenship: Essays and Reflections. Multilingual Matters.*）。
- 細川英雄（2022）『対話することばの市民——CEFR の思想から言語教育の未来へ（日本語教育学研究 11）』ココ出版
- 細川英雄・尾辻恵美・マリオッティ, M.（編）（2016）『市民性形成とことばの教育——母語・第二言語・外国語を超えて』くろしお出版
- 山脇啓造（2020）『『多文化共生』の英訳はどうしたらよいか』一般財団法人自治体国際化協会（CLAIR）多文化共生ポータルサイト『コラム多文化共生 2.0 の時代』第 30 回
<https://www.clair.or.jp/tabunka/portal/column/contents/114811.php>（2024 年 1 月 15 日）
- 吉開章（2023）『入門やさしい日本語 増補版』アスク出版

資料：

- 朝日新聞（2023）7 月 3 日付朝刊「（多民社会）やさしい日本語へ、歩み寄る時 丁寧すぎる言葉遣い『受け入れ側、変わらないと』」
- kokohana やさしい日本語でつながる八王子の会主催ワークショップ『『第三者返答』って何？』（2022 年 12 月 14 日開催）配布資料
- やさしい日本語ツーリズム研究会ホームページ（<https://yasashii-nihongo-tourism.jp/>）
- やさしい日本語ツーリズム研究会（2021）やさしい日本語ラップ「やさしい セカイ」
<https://www.youtube.com/watch?v=2fYxhoUwqAg>）
- やさしい日本語ツーリズム研究会（2022）ショートムービー「第三者返答」
https://www.youtube.com/watch?v=56FPX_u0Y0g）